

Pichari ~ピチャリ~

七飯町歴史館だより

第162号

nanae historical
museum collection

ななえ古写真物語 VOL.162

亭から館へ
見晴旅館のはなし
大正7年か？
大沼公園



七飯町の観光地の代名詞は「大沼」である。そもそも湖が現在の形になったのは江戸時代初期といわれているので、景勝地として長い歴史を持つわけでもない。記録によれば江戸時代後期から、少しずつ景観の美しさが記されるように放ったが、いざ公園としての歴史をひもとくと、函樽鉄道の敷設に端を発し、徐々に旅館が建設されるようになった。交通の便が良くなったことで、大沼への人の流れが次第に増大したのだろう。さらには、明治後半から昭和初期にかけて公園整備の動きが徐々に活発化し、昭和33年に、大沼国定公園となった。

現在、その数は減少してしまったが、盛況だったころは旅館、ホテルの数も多かった。これまで発行してきたピチャリでも、幾つかの旅館を紹介したこともあるのだが、未だに大沼における旅館史は、調べきれいていないのが実情である。

建物の写真はあるのだが、名前が分からないもの。名前は記録されているのだが、建物の全容が知れていないもの、どちらの記録すらないものも含めると、その数は知る由もない。今回は当館の棚隅に保管されていた上の写真を紹介する。

この旅館は、シンプルな木造二階建てで、一階も二階も縁側のような開放的な造りになっており、二階の雨戸の収納箇所に「旅館見晴館」の文字が見られる。昭和51年に発行された「七飯町史」にも、若干の増築はあるが同じ造りの見晴館の写真が掲載されているため、少なくともこの頃までは、同じ建物が利用されていたと想像され、大沼公園広場に面した一角に建っていた。

では、開業はいつからかと調べてみると、大正7年7月18日発行の函館毎日新聞広告に「改築御披露 見晴亭事改名見晴館相馬」とあり、見晴館は大正7年に改築されたこと、前身が「見晴亭」であったことがわかった。しかし、「では、見晴亭はいつから？」という疑問が生まれる。残念ながら当館で所蔵の文献に答えは見当たらない。新聞で辿った限りでは、大正3年が初出で、大正2年8月に「相馬休憩所」の記載が認められた（見晴館主は相馬姓）が、堂々めぐりの様相となってきた。

調べる度に、新たな疑問が増えるのは、歴史調査にはつきものなのだが、宿題ばかりが積み重なるのが現状である。

縄文のおはなしと勾玉づくり

5月のジュニア探検クラブは、雨天のため、プログラムを変更し、縄文の授業と勾玉づくりに挑戦してもらいました。町内にある遺跡の数やどんな場所に遺跡が存在するかなど、皆で自由に発言し、出土した土器や石器に触れながら体感する縄文の授業となりました。博物館の強みは、教科書や本から一步踏み出して、実際に資料に触れることができ、五感で感じられることです。さらに興味を広げたいければ、知るための書物や詳しい解説も聞くことができます。子どもたちからは、学校でまだ習っていない縄文のことも、すでに本で読んで知っていたとか、歴史の授業が楽しみになったと感想を伝えてくれました。さて一方「勾玉づくり」というと、小刀を使って、型紙に添って形を削ったあとは、紙やすりの番数を徐々に細かくしながら整えていくのですが、事前の説明をきちんと聞いていたので怪我もなく、苦心のあとがうかがえる立派な「勾玉」が出来ました。



7月の予定

1	木	パネル展開催予定
2	金	
3	土	
4	日	
5	月	
6	火	
7	水	夜の博物館前期講座第2夜
8	木	
9	金	
10	土	
11	日	
12	月	
13	火	
14	水	
15	木	特別展「縄文のカタチ」開催
16	金	
17	土	ジュニア探検クラブ
18	日	
19	月	
20	火	ピチャリ163号発行
21	水	
22	木	海の日
23	金	スポーツの日
24	土	
25	日	
26	月	
27	火	
28	水	
29	木	
30	金	
31	土	

※7月の休館日はありません

夜の博物館が始まりました。

前期講座の夜の博物館が始まりました。第1回は、『デジタル地図でよみとく地域の歴史』と題し、あっさぶ文化遺産調査プロジェクトの石井淳平氏をお招きし、多様な地図から見える七飯の自然環境の変化や遺跡の立地、扇状地地形である七飯市街地がどのように成り立ってきたかをわかりやすくお話して頂きました。改めて地図の進歩は目覚ましく、デジタル地図は、私たちの暮らしをより客観的に写し出す指針になっていると感じた講座でした。地図って楽しい。



布 団

特別展の土器借用の為に手作りする梱包用布団。真綿を薄葉紙で包んだものです。



編集後記 ~tawagoto~

特別展の準備のため、他市町の縄文土器を見る機会に恵まれた。やはり実物に触れ、観察するとワクワクする。初見の土器が多かったことは、いかに自分が現場から遠ざかっていたかを再確認することでもあったが、今は普及活動という役割が優先だ。近年、縄文時代の評価は、環境への配慮や持続可能などが囁かれるが、土器を見て、ただただ訳もなく面白いと感じる自分がいたことが新鮮だった。興味の始まりはそんなものなのだろう。(やまだひさし)

Pichari

~ピチャリ~

第162号

令和3年6月20日発行

七飯町歴史館

〒041-1193 亀田郡七飯町本町6丁目1-3

電話 0138-66-2181 FAX 0138-66-2182

E-mail : rekishikan@town.nanae.hokkaido.jp